関連学会印象記

第6回アセアン麻酔学会に出席して

堂崎信一*

第6回アセアン麻酔学会 (ACA) 総会は，Dr. Manuel Silao 会長のもとで1989年11月28日（火）から12月1日（金）までの4日間，フィリピン・マニラの国際会議場で開催された．今回日本からの出席は，北海道大学から劔物修教授以下6人（演題8）と藤森貢教授，檀健二郎教授，諏訪邦夫助教授，その他には，筑波大学から1人であった．ほとんど全員が学会場の真横の Westin Philippine Plaza Hotel だったようで，後にこれが命拾いになろうとは，誰も予想していなかったはずである．11月27日（月）成田発マニラ行 JAL で午後2時過ぎに，ニノイ・アキノ国際空港に到着した．空港でお会いした大阪市立大学の藤森貢教授と共に，オンボロのリムジンに乗ってホテルに到着した．空港からホテルまでに感じたことは，この国の貧困（経済的，政治的）であった．その日は早速学会の登録とスライド受付を済ませ，後は発表当日を待つだけにした．雪の積もっている札幌から常夏のマニラへと気温差 30°C 以上の変化にはさすがに驚かされたが，丁度乾期だったので暑さにはすぐに慣れた．

11月28日，午前9時30分から開会式がにぎにぎしく催された。フィリピンのみならずアジアにおける麻酔界の大御所である Prof. Quintin J. Gomez を中心に，アセアン6カ国代表と学会役員が壇上に並び，それぞれ挨拶と祝辞を述べた．次いで，マレーシアの Dr. Saywan Lim が Prof. Gomez に捧げる記念講演 "Challenges to Health in ASEAN" を行った．12時からは歓迎昼食会がもたれ，お互いに親睦をはかり，午後2時からやっとシンポジウムと一般演題の発表が始まった．劔物教授が2題，片山先生が1題 "Monitoring and Instrumentation" で発表したが，非観血的血圧測定法（トノメトリ法）やコンピュータに対する関心が高かったようで，それぞれ質問が多かった．地元テレビ局の取材があり，これがあとでアジア諸国で報道され，北大の麻酔科から沢山マニラに行っていることが知られた．他の会場では，シンポジウムと症例検討が行われ，どの会場も満席の盛況であり，フィリピンの麻酔科医の熱意が感じられた．

11月29日，午前8時より9時30分まで Sunriser Refresher Course と銘打って，局所麻酔に関する教育講演があり，その後シンポジウムと症例検討が11時まで行われた．午後2時から Janssen 主催による Ketanserin のシンポジウムと，Ohmeda によるモニタリングのシンポジウムが行われた．私共は，劔物教授のフィリピンの知人 (Dr. Oracion) の案内でマカティ・ショッピング・センターに行きお土産を買い，夜は若者だけでスペイン料理を食べに出た．これが最初で最後の外出になるとは考えてもいなかった．

11月30日も午前8時から Sunriser Refresher Course 2題のあと，小児麻酔のシンポジウムと術後合併症に関する症例検討および一般演題（筆者はここで発表）のセッションが行われ，午後からは ACA 恒例の Residents Forum があり，北大からは3人が4題の発表を行った．しかし，このセッションの最中に一般演題や症例検討が同時に行われており，又，会場も2つに分散していたので，本当に公正な審査が出来たのかどうかは，はなはだ疑問であった．午後7時からはイメルダ夫人の所有物であった Coconut Palace で Filipiana Night と称して，Ohmeda の後援で盛大なガーデン・パーティが催され，フィリピン民族舞踊に続いてアセアン各国の余興が披露された．ダ

*北海道大学医学部麻酔学講座

Presented by Medical*Online

ンス・パーティは午前2時頃まで続いたそうだが，私共は12時に引き上げてきた．この時，対岸ではクーデターの準備が着々と進められていたのであろうが，何も知らずに参加者は，アセアンの交友を深めていたのである．明日はマラカニア宮殿を見学に行く予定であった．

12月1日，昨夜の興奮も覚めやらぬうちに，藤森教授からの電話で空港閉鎖を知った．日本の報道の方が現地よりも詳しい情報を提供していたと思われるので，詳細は割愛する．それでも，午前中のプログラムは予定通り終了し，12時からは閉会式とそれに続く送別昼食会がとり行われた．開会式の華やかさとは正反対に，会場全体を重苦しい空気が覆っていたが，役員一同は何とか学会をやり終えたという安堵感で持ちこたえていたようだ．その席上，藤森教授は日本麻酔学会を代表して Silao 会長に記念の楯を贈呈し労をねぎらった．Plaza Hotel は全く安全であり，典型的なリゾートホテルであったので，私共はプール・テニスコート・サウナ・スポーツクラブなどをフルに活用して，帰国できる日を待ちながら体を鍛えていたのである．予測もしていなかったクーデターのために，予定よりも3日遅れて12月5日に帰国したが，一度に天国と地獄を味わうという貴重な体験をすることが出来た．

学会の発表は，全体的に日本と比較して，やはり数年の隔たりがあり，ほとんどが臨床的かつ初歩的な感じがした．日本からの参加は，今回は10人足らずで，前回のシンガポールと比較すると10分の1以下であったらしい．参加人数が開催地により左右されるのは至極あたりまえではあるが，今後アジア諸国との親交を保つためには，ACAにも積極的な参加が必要とも感じられた．次回は，1991年にマレーシアのクアラルンプールで開催される予定である．

一般演題発表中の筆者

Presented by Medical*Online